

Lampiran

Kore

1. 「昨日のことですが、例によって、窓のところに立っているのです、またチンドン屋だと思って授業をしておりましたら、これが、また大きな声で、いきなり、「なにしてるの？」と誰かに、なにかを聞いているんですね」

(ページ22)

2. トットちゃんが、口をつぐんで考えていると、先生はいった。
「もう、ないかい？」
トットちゃんは、これでおしまいにしてしまうのは、残念だと思った。

(ページ38)

3. それが、この校長先生といると、安心で、暖かくて、気持ちがよかったです。
(この人なら、ずーっと一緒にいてもいい)
これが、校長先生、小林宗作氏に、初めて逢った日、トットちゃんが感じた、感想だった。

(ページ42)

4. ママは大変だった。^{おおいそが}大忙しで、「海のものやまのもの」のお弁当を作り、トットちゃんに朝御飯をたべさせ、毛糸で編んだヒモを通した、セルロイドの定期入れを、トットちゃんの首にかけた。これは定期を、なくさないためだった。

(ページ46)

5. 今と違って、昔の電車は、外から開くように、ドアに取手がついていた。両手で、その取手を持って、右に引くと、ドアはすぐ開いた。トットちゃんは、ドキドキしながら、そーっと、首をつっこんで、中を見ていた。

「わあーい！！」

これなら、勉強しながら、いつも旅行をしてるみたいじゃない。網棚もあるし、窓も全部、そのままだし、違うところは、運転手さんのせきのところに黒板があるのと、電車の長い腰かけを、はずして、生徒用の机と腰かけが進行方向にむいて並んでいるのと、つり革がないところだけ。

(ページ50)

6. また、生徒にとっても、好きな学科からやっていい、というのは、うれしいことだったし、嫌いな学科にしても、学校が終わる時間までに、やればいいのだから、なんとか、やりくり出来た。従って、自習の形式が多く、いよいよ、わからなくなってくると、先生のところに聞きに行くか、自分の席に先生に来ていただいて、^{なっとく}納得のいくまで、教えてもらおう。そして、例題をもらって、また自習に入る。これは本当の勉強だった。

(ページ56)

1. 校長先生は、音楽家でもあったから、「お弁当を食べる前に歌う歌」というのを作った。ただし、これは、作曲が、イギリス人で、歌詞だ

けが、校長先生だった。というより、本当は、もともとあった曲に、先生が替え歌をつけた、というのが、正しいのだけれど。

(ページ68)

2. よーく噛めよ

たべものを

噛めよ噛めよ噛めよ噛めよ

たべものを

そして、これを歌い終わると、初めて、「いただきまーす」になるのだった。

(ページ72)

3. セミがほうぼうで鳴いていた。

二人とも、満足していた。

そして、泰明ちゃんにとっては、これが、最初で、最後の、木登りになってしまったのだった。

(ページ94)

4. という風に説明したほうがいい、と考えたのだった。やっと思いついた嘘を、家に帰るなり、トットちゃんは、ママにいった。

「さっきさ、道歩いてたら、よその子が、みんなで、私の背中にナイフ^な投げたから、こんなに破けたの」

いいながら、(ママが、いろいろ、くわしく聞いたら困るな) と思っていた。ところが、うれしいことに、ママは、

「あら、そう、大変だったわね」
といただけだった。（ああ、よかった）と、トットちゃんは安心して、（これなら、ママの好きな洋服が破れたのも仕方がなかった．．
．って、ママにもわかってもらえた）と思った。

(ページ98)

5. 例えば、「^{こい}鯉

のぼり競走」というのは、出発点から、ヨーイドン！で、少し走って、校庭のまん中に置いてある、というか、寝ている、大きい布の鯉のぼりの、口から入って、しっぽから出て、また出発点まで帰って来る、
、こののだった。鯉は、青い色が二匹^{ひき}
と赤いのが一匹で、合計三匹いたから、三人が同時にヨーイドン！で
出発した。でも、これは、やさしいようで、案外むずかしかった。

(ページ112)

6. それからまた、「お母さん探し競争」というのもあった。これは、ヨーイドン！で、少し走って、横に長く置いて立ててある、木の梯子^{はしご}
の、段と段の間を通り抜け、そのむこうにある籠^{かご}の中の封筒^{ふうとう}
から、紙をとり出し、例えばそれに、
「サッコちゃんのお母さん」

(ページ114)

7. 「サッコちゃんのお母さん」

と書いてあったら、見物人の中に行って、サッコちゃんのお母さんを探し、手をつないでゴールインでするのがだった。これは、横にし

である梯子の四角い穴をくぐるのだから、よほど猫みたいにうまくやらないと、お尻とかがひっかかった。

(ページ114)

8. 「昔、人間には、しっぽが、あった」
という話をしてくれたのだった。これは、とても、楽しい話で、みんな、元気に入った。

(ページ128)

9. それなのに、いくら、可愛いく見えたからといって、よりによって高橋君に、「しっぽがあるんじゃない？」というような不用意な発言は、校長先生には、考えられないことだった。これは偶然、朝の授業を、校長先生が、後ろで参観して、わかったことだった。

(ページ130)

10. 「みなさん、『お馬の親子』ですよ、元気よく、さあ、三！四！」
と、指揮を始めた。
これも、トットちゃんの知らない歌だった。

(ページ152)

11. 「英語で、狐はフォックスで、靴はシューズ、って知ってるんだもの、なれるんじゃないの？」

これでも、充分じゃ、なさそうだ。

(でも、泰ちゃんなら、いずれにしても、利口な人のする仕事にむいている)

と、トットちゃんは、思った。

(ページ174)

12. この「サワカイ」は、良ちゃんが、トモエに残してくれた、素晴らしい贈りものだった。そして、そのときは、みんなが考えてもいなかったことだけど、これが、実は、そのあと、みんなが、別れ別れになってしまう前の、トモエでの最後の、心の通いあう、楽しい、遊びだったのだ。

(ページ200)

Sore

13. 新しい学校の門をくぐる前に、トットちゃんママが、なぜ不安なのかを説明すると、それはトットちゃんが、小学校一年なのにかかわらず、すでに学校を退学になったからだった。一年生で！！

(ページ14)

14. 講堂は、さっきトットちゃんが、上がって来た石の階段のつきあたりにあった。行ってみると、生徒たちが、大さわぎをしながら、机と椅子を、講堂に、まーるく論になるように、並べているところだった。隅っこで、それを見ていたトットちゃんは、校長先生の上着をひっぱて聞いた。

(ページ42)

15. こうして、九人の生徒が、トットちゃんの電車に乗り込んで来て、それが、トモエ学園の、一年生の全員だった。

(ページ54)

16. さて、トットちゃんが待ちに待った『海のものど山のもの』のお弁当の時間が来た。この『海のものど山のもの』って、なにか、といえは、それは、校長先生が考えた、お弁当のおかずのことだった。
(ページ62)

17. といい、みんなが、講堂に集まると、小さなステージの上に、ゴワゴワしたものを、待って上がって。それはグリーン色のテントだった。
(ページ80)

18. 講堂での野宿^{のじゆく}
の次の次の日、とうとう、トットちゃんの大冒険の日が来た。それは、泰明ちゃんとの約束だった。
(ページ84)

19. そして、その約束は、ママにもパパにも、泰明ちゃんの家の人にも、秘密だった。その約束が、どういふのか、というど、それは、「トットちゃんの木に、泰明ちゃんを招待する」といふものだった。
(ページ84)

20. それから、二人は、ずーっと木の上で、いふんな話をした。泰明ちゃんは、熱をこめて、こんな話もした。
「アメリカにいて、お姉さんから、聞いたんだけど、アメリカに、テレビジョンていふのが出来たんだって。それが日本に来れば、家にて、国技館の、お相撲が見られるんだって。箱みたいな形だつて」

(ページ94)

21. トモエの運動会は「十一月三日」と決まっていた。それは、校長先生が、いろんな所に問い合わせた結果、秋で、雨の降ることが最も少ないのが、この十一月三日とわかったので、そう決めて以来、毎年、この日にやることになっていた。

(ページ112)

22. さて、運動会が始まって、驚くことが起こった。それは、どの競技も（たいがい全校生徒が一緒にやるのだけれど）、学校で、一番、手足が短く背の小さい、高橋君が一等になっちゃったことだった。

(ページ120)

23. その頃、他の学校では、たいがい、ノートや鉛筆や、消しゴムなどだった。でも、他の学校のことを知らなくても、みんな、野菜というのには、少し抵抗があった。というのは、トットちゃんにしても、ゴボウとおねぎをいただいたんだけど、それを持って電車に乗るのはなんだか恥ずかしい気がした。

(ページ122)

24. きっと、ふつうの小学校では、生徒に、なにかを教える人には、「先生の資格」とか、いろいろ規則があるだろうけど、小林先生は、かまわなかった。子供たちに、「本物」を見せることが必要なのだし、それが、大切なことだった、と先生は考えていた。

(ページ136)

25. でも校長先生、そういう事件が起きたときに、絶対に、パパやママを呼び出すことはなかった。他の生徒でも同じことだった。いつも、それは、校長先生と、生徒との間で解決した。
(ページ142)
26. 「いい子じゃないと、君は、人に思われているところが、いろいろあるけど、君の本当の性格は悪くなくて、いいところがあって、校長先生には、それが、よくわかっているんだよ」
(ページ144)
27. 「トットちゃん！」
という泰ちゃんの声が、怒ってるみたいなので、びっくりして立ち止まった。泰ちゃんは、一息つくと、いった。
「大きくなって、君がどんなに頼たのんでも、僕のお嫁さんには、してあげないからね！」
それだけいうと、泰ちゃんは、下をむいてまま、歩いて行ってしまった。
(ページ146)
28. 兵隊さんの涙が、なんであったのか、それは、その兵隊さんにしか、わからないことだった。
(ページ154)
29. 宮崎君は、まず、英語で文章を読んでもくれた。それは、とてもとても、なめらかな言葉で、みんなは、うっとりした。
(ページ160)
30. 教会は、白い百合の花が、たくさんあった。泰明ちゃん、きれいなお姉さんや、お母さんや、お家の人たちが、黒い洋服を着て、入り口の外に立っていた。みんな、トットちゃんを見ると、それまでより、もっと泣いた。
(ページ166)
31. 泰明ちゃんのこと、トモエのみんなは、ずーっと悲しかった。特にトットちゃんのクラスは、朝、電車の教室で、もう、いくら授業が始まる時間になって泰明ちゃん来なくても、それは遅刻じゃなくて、絶対に来ないのだ、と馴れるのに時間が、かかった。
(ページ168)

32. もし、泰明ちゃんの席が決まっています、そこが、いつまでも空いてるとしたら、それは、とても、つらいことだったに違いない。
(ページ170)

Are

33. (この前、病院にいる兵隊さんをお見舞いに行ったとき、看護婦さんは、注射なんか、してあげてたじゃない？あれは、ちょっと、むずかしそうだ...)
(ページ170)

RIWAYAT HIDUP

Nama : Josephine Natalie
Jenis Kelamin : Perempuan
Tempat, tanggal lahir : 26 December 1987
Alamat : Jl. Pasir Kencana no. 28
Perumahan Bumi Kopo Kencana
Bandung-40233
Nama Ayah : (Alm) Setyadi A. Pranadjaja
Nama Ibu : Theresia Juniati

Pendidikan

TK Permata Bunda, Jakarta
SDK Permata Bunda, Jakarta
SMPK Permata Bunda, Jakarta
SMAK BPPK, Bandung